

2015 年、中国は南シナ海で如何なる動きをするか

漢和防務評論 20150602 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、6 月 16 日南シナ海で進めていた珊瑚礁の埋立工事を「近く完成する」と発表しました。その理由は周辺国をはじめとする世論の厳しい非難を一時避ける為であることは疑いの余地がありません。

中国は、自国に疑念を抱く ASEAN 各国の懐柔を図っていますが、特に今年は ASEAN 議長国が当面の標的であるマレーシアであることから行動が慎重になっています。また 9 月には習近平の訪米があるようで、中国としても南シナ海収奪はここで一休み、ということでしょうか。

KDR クアラルンプール KHOO JIN KIAT 特電：

中国は、今年、南シナ海で大きな動きをするだろうか？或いは縮小に向かうか？過去の例から判断すると、中国が南シナ海で大胆な行動を採ったかどうかは、年度によって異なった。輪番制の ASEAN 議長国がどの国か、によって中国は行動を選択したのだろうか？

最近 5 年間、南シナ海では激烈な海上摩擦が発生している。中国は、2010 年から南シナ海に主権を主張する国家と海上摩擦を発生させている。2010 年 4 月、中国公船はマレーシアが支配する南沙島嶼海域で 2 度マレーシア海軍から排除された。2011 年 4 月、中国はベトナムの海底探査船のケーブルを切断した。2012 年、中国は、フィリピンと黄岩島の争いを起こした。2013 年、南シナ海は黄岩島の争いに関連する若干の衝突以外は比較的平静であった。フィリピンは、この年、南シナ海問題を国連の仲裁裁判所に正式に提訴しようとした。これは近代以降、南シナ海問題で法による仲裁を求めた初めての事例となった。

2014 年の南シナ海の衝突は過去最大のものとなった。ベトナムは、981 号掘削リグの作業がベトナム海域で行われているとして不満を示し、激烈な海上摩擦が発生した。当時、中越間の海上衝突は、日中間の釣魚島／尖閣群島の摩擦と同時進行した。

2010 年、ASEAN 議長国はベトナムであり、2011 年はインドネシア、2012 年はカンボジア、2013 年はブルネイ、2014 年はミャンマーであった。

2012 年と 2014 年の 2 年は海上衝突が最も厳しい年であったが、うまい具合にこの 2 年は、伝統的に親中国の国が ASEAN 議長国になった。2012 年の ASEAN 外相会議では、中国の南シナ海における強引な行動を聯合公報に記載するのを議長国カンボジアが拒否した。したがって当年の ASEAN 外相会議は、南シナ海問題で共通認識が得られず、最終的に聯合声明は発表出来なかった。これは ASEAN 成立後 45 年間で初めて聯合声明が発表できないという大事件となった。さらに ASEAN

に対する信用に重大な影響を与えた。

結果として、マレーシアとインドネシアの仲介努力により、ASEAN 外相会議は、事件後” ASEAN の南シナ海に関する六つの原則” (ASEAN'S Six-Point Principles on the South China Sea) を発表し、何とか ASEAN 外相会議の体裁を整えた。また 2014 年に、ミャンマーが議長国の年に聯合声明の” 発表が遅れる” 事件が発生した。当時はその理由を” TYPING ERROR” とされたが、なぜカンボジアとミャンマーが議長国の時だけ、このような事件が起きるのか？推測すれば、この両国に対して（特にカンボジアに対して）中国は大きな影響力を持っているので、この両国が議長国の時に南シナ海で大胆な行動を採っても、ASEAN からの圧力を阻止できると中国は考えていたのではないか。2012 年の ASEAN 外相会議が共通認識を示す聯合声明が発表出来なかったのはその好例である。したがって 2010 年と 2011 年の海上での争いの中で、中国はベトナムが議長国であることを認めなかった。しかし 2011 年には、インドネシアがこの地域の大国であり、イスラム教徒が大多数を占めることを考慮し、中国は過激な行動は採らなかった。

興味深いことに、ブルネイが ASEAN 議長国であった時に、中国は南シナ海であまり大胆な行動は採らなかった。偶然にもブルネイとインドネシアはイスラム教徒の多い国家である。中国はイスラム国家とあまり問題を起こしたくないようだ。これはなぜか？マレーシア、インドネシア及びブルネイは、中国と比較的友好な関係にあるが、インドネシアは南シナ海問題で敢えて強い発言をしている。しかし中国はこの方面で反論を避けている。その理由は、南シナ海でイスラム国家と激しい摩擦を引き起こすと、中国国内のイスラム教徒たちの反発を招く恐れがあるからだ。

以上の点を考慮すると、2015 年にマレーシアが議長国になると、中国は大胆な行動が採れるだろうか？

北京は、おそらく比較的慎重に行動するであろう。

中国とマレーシアは元々密接な関係にある。KDR が理解している範囲では、中国は、マレーシアとの関係を重視し、模範的な関係を結ぼうとしているだけでなく、予想外の問題発生を恐れているようだ。この理由は、さらに多くの問題が発生するのを避けるためであり、第三者が機に乗じてマレーシアに圧力をかけ、ひいては ASEAN が中国の行動を制約するのを避けるためである。

第一、今年 1 月、中国海洋石油 981 号リグは、平穏無事に南シナ海、マラッカ海峡を通過しインド洋に入った。中国外交消息筋は、KDR に対し、「981 リグが南シナ海を通過する際、中国官方は、マレーシアへの通報を含め通報業務を行った。これは、出来るだけ敏感な問題が発生するのを避けるためであり、南シナ海周辺国家の敏感度を高めないためである」と述べた。

第二、中国軍艦は今年曾母暗沙（中国側の名称）に進出しない可能性がある。中国

は2013年3月から2014年1月の間、連続2年、曾母暗沙に進出しパトロールを行った。曾母暗沙は、マレーシアの砂拉越州海岸から距離がわずか約80KMである。

中国は、議長国であるマレーシアに配慮するほか、もう一つの理由は、中国が今年中にマレーシアと初めて実兵演習を行うことになっているからだ。したがって中国は意表を突いた行動にでる必要がない。中国にとっては、南シナ海で主権争いしている当事国と軍事演習を行うことは、すでに政治的勝利を得たことを意味する。

中国軍艦が曾母暗沙に出現するかどうか注目すべき理由は何か？

第一、もし中国軍艦が継続して曾母暗沙に進出したならば、中国はマレーシアのASEAN議長国としての立場を無視したことになる。これは、相手が誰であろうと、マレーシアが中国の友好国であろうと、中国の南シナ海政策が確実に強硬政策に転換したことを意味する。

第二、もし中国が今年曾母暗沙に進出しなかった場合、習近平の南シナ海政策は実際はそれほど強硬ではなく、柔軟性があることを意味する。しかも相手が誰であろうと、柔軟性をもって処理しマレーシアを困らせることはない。

今年の2月までに、南シナ海で大事件は発生しなかったが、1月29日、中国海警船が黄巖島海域でフィリピン漁船と衝突摩擦事件を起こした。東南アジア情勢に詳しい中国外交官は、率直に事件を認めたうえで、「中国は、どの国が議長国であるかを考慮するほか、国内の政治状況を考慮しつつ、南シナ海で行動を起こすタイミングを図っている」と述べた。

同時に中国は、その他の問題にも対応しなければならない。ASEAN国家と対話する関係にある国家（日米を含む）を含めたASEAN国家は、今年年末に開催される予定のASEAN地域フォーラムで、中国が南シナ海で進行中の相当大規模の埋立工事問題が取り上げられる可能性がある。今年1月に行われたASEAN外相会議非公式会議では一部のASEAN国家がこの問題を提議した。

そのほか、2015年のASEAN軍事協力方面について今後の方向は、ASEAN武装部隊首長非公式会議（Asean Chiefs of Defence Forces Informal Meeting (ACDFIM)）は、ASEAN国防部長会議の同意を得て、計画書を作成し、ASEAN武装部隊首長拡大会議（ACDFM-Plus）を成立させる。同時にASEAN武装部隊首長会議は常設の秘書室を設ける。輪番の議長国は秘書を差し出す。ASEAN国防相会議（ASEAN Defence Minister's Meeting (ADMM)）は、2010年に正式に成立した”ASEAN国防部長会議”（ADMM-Plus）が発展したものである。したがってASEAN武装部隊首長非公式会議が正式に”ASEAN武装部隊首長会議”及び拡大会議に改められた後、ASEANの防衛協力の枠組みが徐々に成熟し完成に向うであろう。

過去 12 年来、ASEAN 各国の武装部隊首長会議は、” 非公式” のままであった。しかし ASEAN 地域国家の防衛協力が推進されるに従って、” 非公式” 会議は” 正式” 会議に昇級する。最初の ASEAN 武装部隊首長非公式会議は 2003 年に開催された。そして最初の ASEAN 国防部長会議は 2006 年に開催された。したがってこのことは、中国、米国、ロシア、インド、及び日本等の大国の武装部隊首長が 1 つの対話の枠組みの中に集結することを意味する。

以上